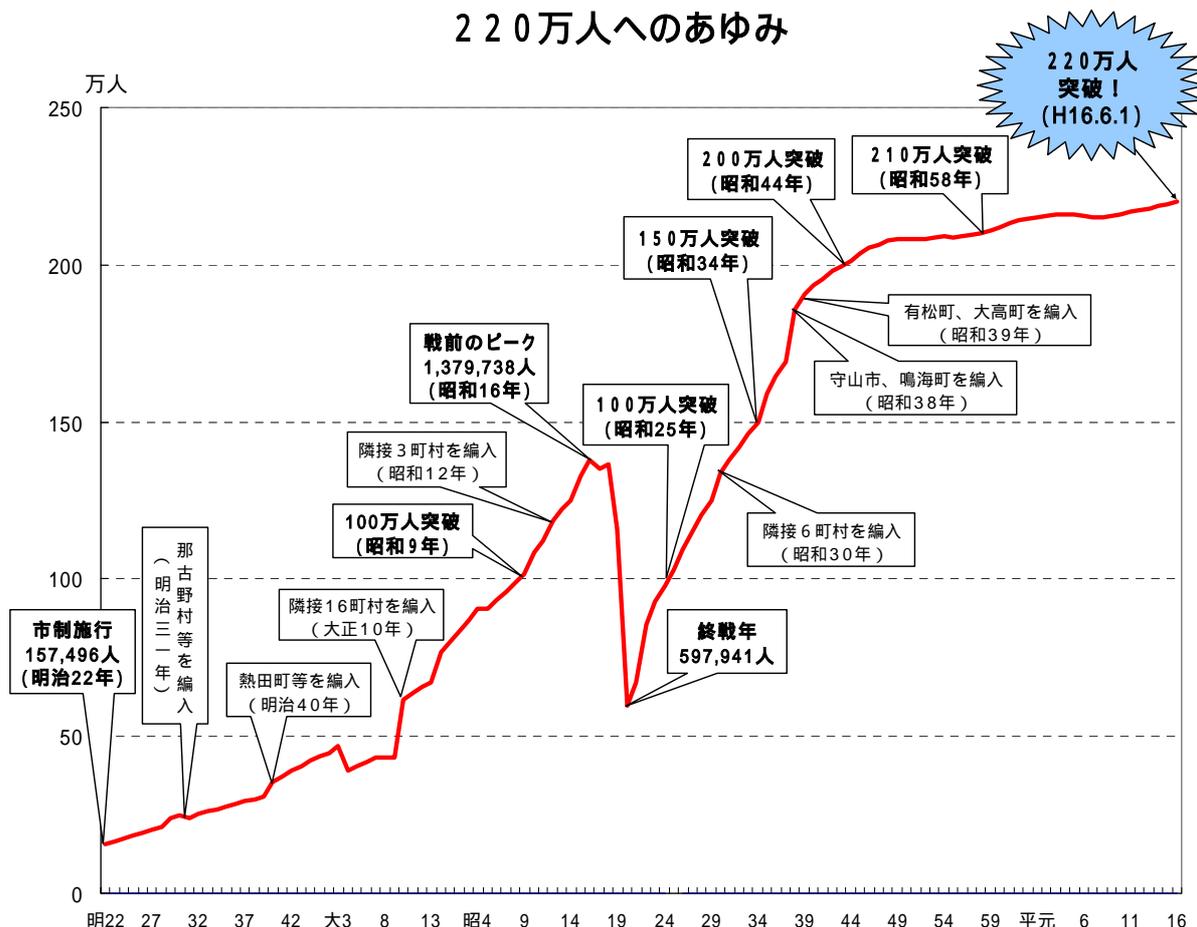


名古屋市の人口が220万人を突破！

名古屋市の人口は、平成16年6月1日現在で2,200,090人となり（前月比1,457人増、前年同月比8,185人増）、210万人を超えた昭和58年11月から20年7か月で、初めて220万人を突破した。

220万人へのあゆみ



1 概況

本市の人口のあゆみをふりかえると、明治22年の市制施行時は、わずか157,496人であった。当時の市域面積は13.34k㎡であり、現在(326.45k㎡)の約4%にすぎなかった。その後、隣接町村の編入等を経て人口は着実に増加し、昭和9年には100万人を超え、太平洋戦争の勃発した昭和16年には約138万人と戦前のピークに達した。

その後、戦争による混乱により人口は激減し、終戦年の昭和20年には60万人弱にまで落ち込んだ。

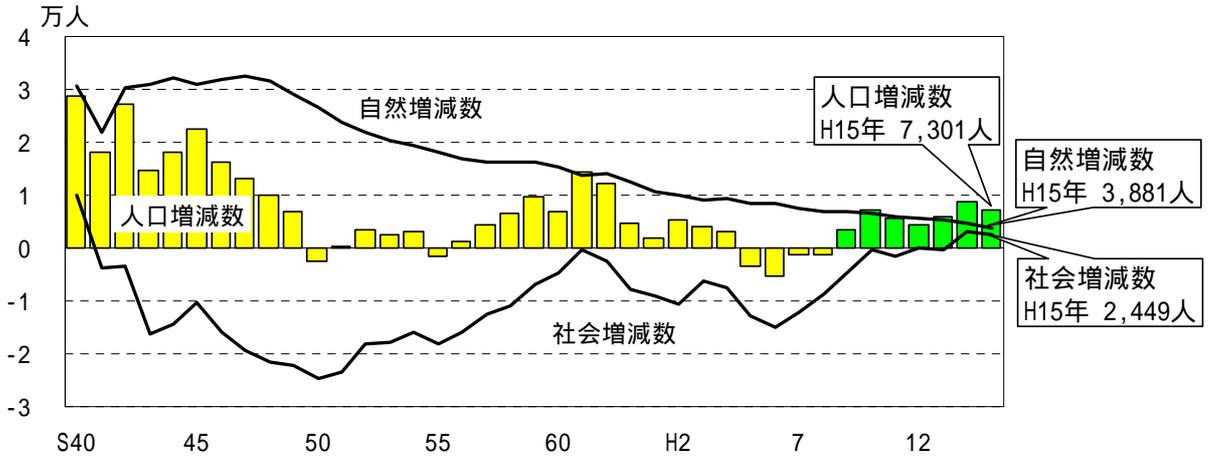
しかしながら、戦後の復興とともに人口も急速に増加し、昭和25年には再び100万人台を回復し、昭和30年代には他地域からの流入に周辺市町村の編入が加わり、人口は増加の一途をたどった。

昭和40年代に入ると、人口の大都市への集中が鈍化し、同時に、それまで大都市圏の中心部に住んでいた人々の外周部への転出が増加したため、中心部の人口減少と周辺部の人口増加が進行した(ドーナツ現象)。これらにより、社会増減(転入数-転出数)は昭和41年には社会減(転出超過)に転じ、その後も後退を続けた。このため、自然増減(出生数-死亡数)が3万人前後の自然増を維持したにもかかわらず、人口増加のテンポは年々鈍化の傾向にあった。

そうした中、人口が190万人を超えた昭和39年5月から4年9か月後の昭和44年2月には、200万人都市となった。

名古屋市の人口増減の推移(昭和40年～平成15年)

図1 人口増減数、自然増減数及び社会増減数の推移(各年：前年10月～当該年9月)



注：人口増減数には、職権記載・消除等を含むため、自然増減数及び社会増減数の合計に一致しない。

図2 出生数、死亡数及び自然増減数の推移(各年：前年10月～当該年9月)

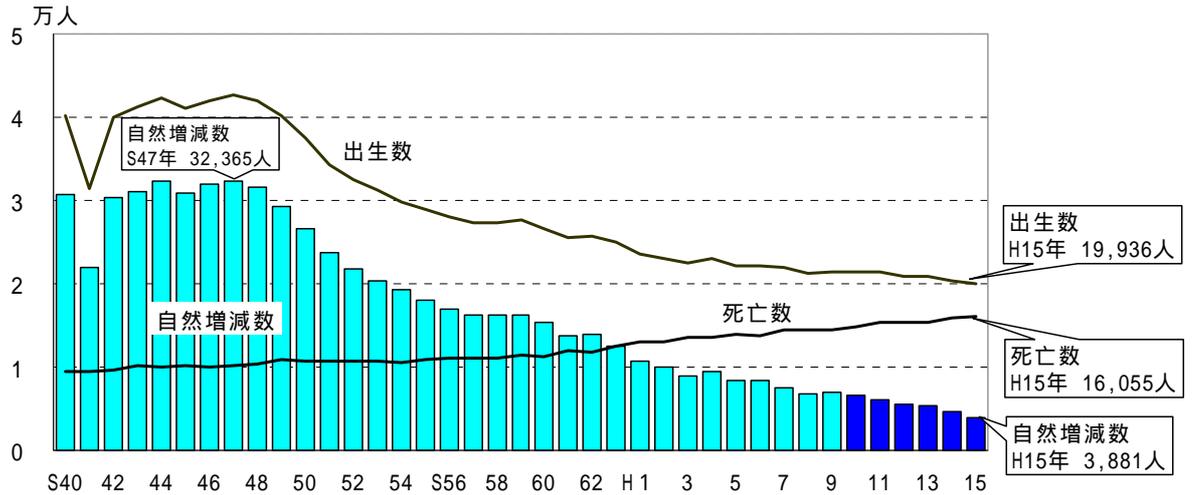
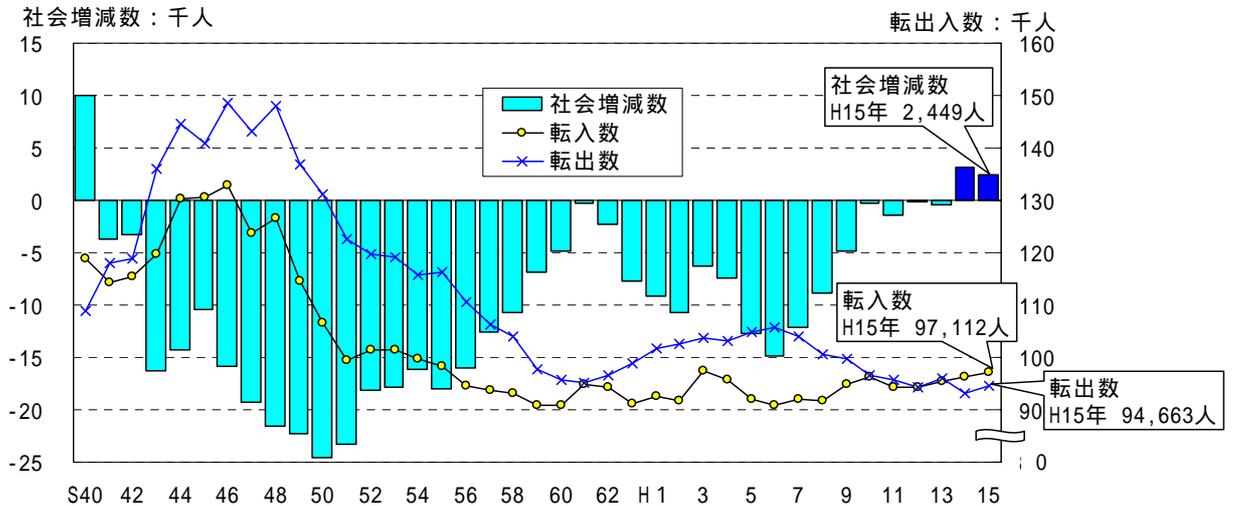


図3 転入数、転出数及び社会増減数の推移(各年：前年10月～当該年9月)



昭和50年代には2万人前後の社会減が続いたのに加え、出生数の減少により自然増加が後退し続け、人口増加をますます低く抑えることとなった。こうしたことから、人口が200万人を超えてから昭和58年11月に210万人を超えるまでに、14年9か月を要した。

昭和50年代後半から60年代初めまでは、全国的に大都市への人口再流入の兆しがみられ、本市の社会減の改善も進み、昭和61年、62年には年間1万人以上の人口増加を示した。しかし、これをピークに社会減は再び拡大を始め、一方で自然増の縮小は長期的に継続しており、人口増加の幅は縮小していった。こうして、平成5年には人口が減少に転じ、以降、平成8年まで4年間、減少が続いた。

しかし、平成6年をボトムに社会減の幅が縮小傾向となり、平成14年には37年ぶりに社会増に転じ、翌平成15年も社会増となった。こうした社会動態の改善により、自然増減は引き続き縮小傾向で推移したものの、平成9年以降、8年連続で人口が増加した（6月1日時点の比較）。この間の社会動態の改善には、バブル経済の崩壊以降、地価の下落により、近隣市町との地価格差が縮小し続けたことから市内での住宅取得が比較的容易になり、市外への転出が抑制されたことが影響しているものと見られる。 【図1～3】

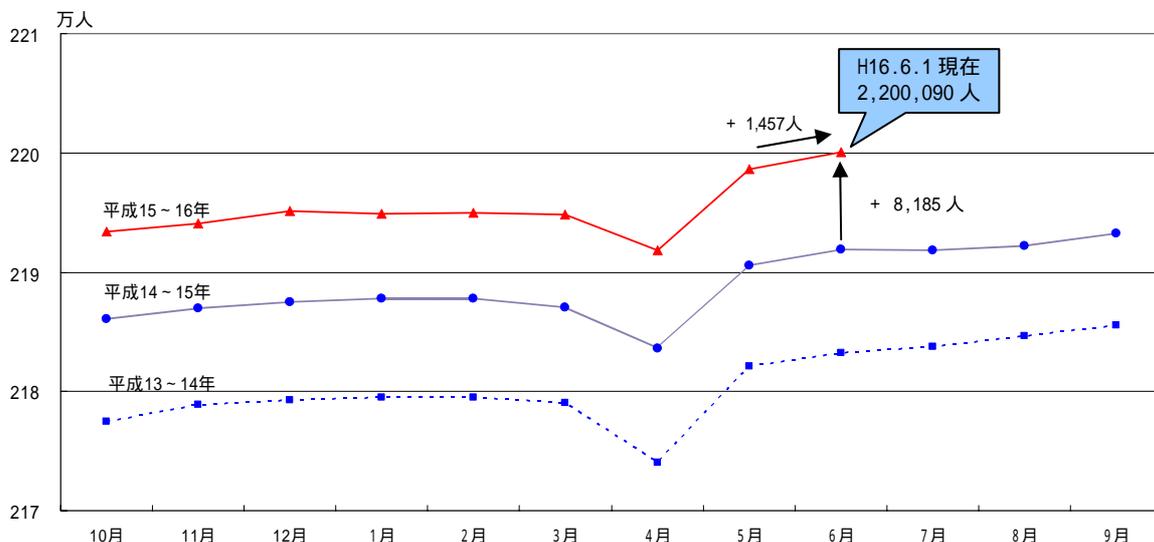
最近の動向を見ると、平成15年10月中から本年5月中まで8か月間の自然増減は1,991人であり、過去2年の同じ時期と比較して遡減しているものの、社会増減が4,723人と遡増しており、人口増減は6,714人と遡増した。こうして、210万人を突破した昭和58年11月から20年7か月で、220万人を突破することとなった。 【表1、図4】

表1 最近の月別異動の推移（平成13年10月中～16年5月中）

月別	自然増減			社会増減			人口増減			
	平成13～14年	平成14～15年	平成15～16年	平成13～14年	平成14～15年	平成15～16年	平成13～14年	平成14～15年	平成15～16年	
10月中	619	634	472	800	240	236	1,419	874	708	
11月中	416	259	304	-48	284	766	368	543	1,070	
12月中	273	283	300	-38	8	-526	235	291	-226	
1月中	166	-74	-13	-127	120	55	39	46	42	
2月中	225	150	201	-725	-923	-344	-500	-773	-143	
3月中	199	173	207	-5,207	-3,592	-3,165	-5,008	-3,419	-2,958	
4月中	280	216	328	7,818	6,696	6,436	8,098	6,912	6,764	
5月中	433	367	192	688	989	1,265	1,121	1,356	1,457	
6月中	331	386	...	184	-422	...	515	-36	...	
7月中	513	600	...	407	-282	...	920	318	...	
8月中	584	437	...	285	654	...	869	1,091	...	
9月中	537	450	...	11	-352	...	548	98	...	
合計	10月中～5月中	2,611	2,008	1,991	3,161	3,822	4,723	5,772	5,830	6,714
	10月中～9月中	4,576	3,881	...	4,048	3,420	...	8,624	7,301	...

（注）社会増減には、職権記載・消除等を含む。

図4 名古屋市の毎月1日現在人口の推移（平成13年10月～16年6月）



210万人を突破してから220万人を突破するまでの人口動向を総括すると、自然動態は181,402人のプラス、社会動態は82,690人のマイナスとなっており、ここ数年は社会動態が改善しているものの、10万人増加には全体として、縮小傾向の続く自然増が寄与している。【表2】

表2 自然動態・社会動態（昭和58年11月中～平成16年5月中）

自然動態		社会動態	
出生数（A）	467,594	転入数（C）	3,173,625
死亡数（B）	286,192	転出数（D）	3,256,315
自然増減（A - B）	181,402	社会増減（C - D）	82,690

(注1) 転入数、転出数には職権記載・消除等を含む。

(注2) 昭和60年、平成2年、7年、12年の各10月1日現在の人口は国勢調査人口に切り換えているため、昭和58年11月1日現在の人口に上記異動数を積み上げても、平成16年6月1日現在の人口には一致しない。

2 区別人口の動向

区別人口を210万人突破時点と220万人突破時点で比較すると、7区で人口が増加、9区で減少した。中でも、中川区の増加のほか、区画整理が進み6万人余り増加した緑区をはじめ、天白区、守山区、名東区といった市東部の人口の伸びが220万人到達に大きく寄与している。緑区は昭和58年には16区中、第6位であったが、本年6月には首位の中川区まであと143人と接近している。

【表3、図5】

さらに、この20年7か月の自然増減、社会増減を区別に見ると、ともにプラスになっているのは、緑区、天白区及び守山区の3区であり、ともにマイナスになっているのは中村区及び中区の2区となっている。他の11区では、自然増減はプラス、社会増減はマイナスとなっている。中でも、南区の社会減の幅は16区中、最大となっている。

【表4、図6】

表3 区別人口の比較

区名	210万人突破時 (昭和58年11月1日)		220万人突破時 (平成16年6月1日)		増減数	増減率 (%)	増加 寄与率 (%)
	人口	順位	人口	順位			
全市	2,101,343		2,200,090		98,747	4.7	100.0
千種区	166,042	3	151,923	8	-14,119	-8.5	-14.3
東区	70,911	14	67,548	15	-3,363	-4.7	-3.4
北区	176,909	2	166,522	3	-10,387	-5.9	-10.5
西区	145,747	7	142,241	10	-3,506	-2.4	-3.6
中村区	155,878	5	132,670	11	-23,208	-14.9	-23.5
中区	67,281	15	68,276	14	995	1.5	1.0
昭和区	109,589	12	104,943	12	-4,646	-4.2	-4.7
瑞穂区	117,121	11	104,573	13	-12,548	-10.7	-12.7
熱田区	64,272	16	63,200	16	-1,072	-1.7	-1.1
中川区	192,271	1	214,451	1	22,180	11.5	22.5
港区	138,730	8	152,629	7	13,899	10.0	14.1
南区	162,826	4	145,554	9	-17,272	-10.6	-17.5
守山区	137,455	9	159,772	4	22,317	16.2	22.6
緑区	154,302	6	214,308	2	60,006	38.9	60.8
名東区	134,473	10	155,709	6	21,236	15.8	21.5
天白区	107,536	13	155,771	5	48,235	44.9	48.8

**表4 区別自然増減・社会増減
(昭和58年11月中
～平成16年5月中)**

区名	自然増減	社会増減
全市	181,402	-82,690
千種区	7,095	-20,370
東区	2,332	-6,733
北区	12,916	-22,361
西区	7,419	-11,316
中村区	-1,672	-22,856
中区	-86	-316
昭和区	2,478	-7,467
瑞穂区	3,122	-15,031
熱田区	1,176	-1,976
中川区	22,289	-826
港区	17,354	-2,873
南区	7,864	-24,145
守山区	18,686	4,891
緑区	30,097	30,872
名東区	26,437	-4,837
天白区	23,895	22,654

(注)表2の脚注2参照

図5 区別人口の比較

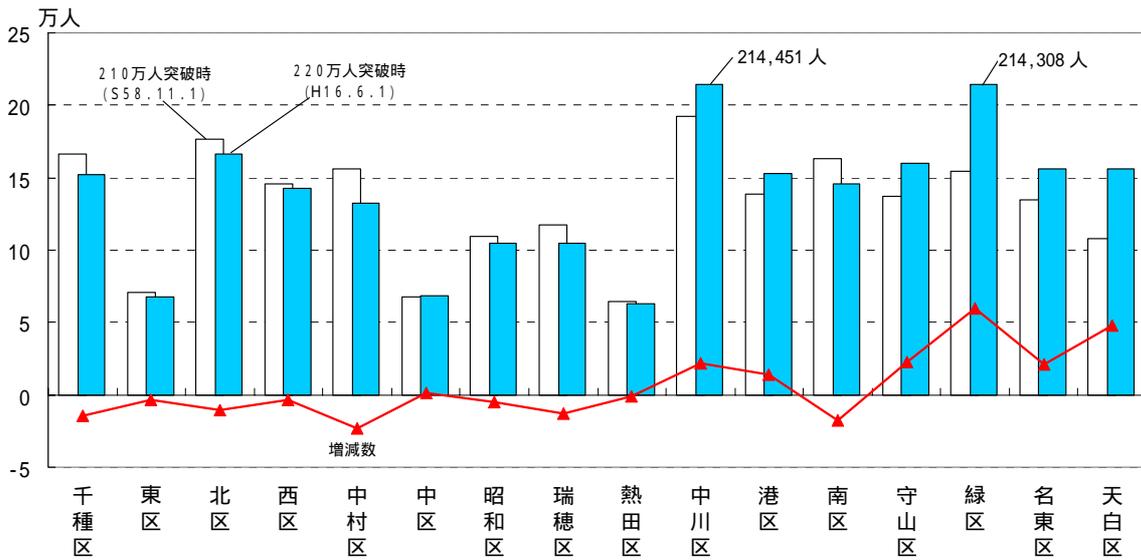


図6 区別自然増減・社会増減 (昭和58年11月中～平成16年5月中)

